

●2012年発売の1stから4年ぶりの新作ということで、前から変化したと感ずることはありますか？

川上: ベーシストが、普段はギターを弾いているトミーに変わったことで、音作りの面で大きな変化がありました。というのも、そもそも僕が創る曲って、曲のハーモニーをよくわかってくれるギタリストが弾くベースと相性がいいと思うんですよ。しかも、ベーシストとして曲の土台としての役割もしっかりこなしてくれてるし。

近藤: 素直なベースだね。癖がなくて。

川上: うん。しかも、ギタリスト的な音作りだから、僕もより空間を意識するようになって、たとえばディレイを使って残響を増やすってことも多くなったし、テンポの速い曲でも違和感なくつなげられるようになった実感があります。

●曲調にも変化が生じましたか？

近藤: 全体的に1stより難しいよね。でも、ドラムはよりシンプルで簡単になったかな。そのほうが曲に合うと思うから。あとは、ボーカルが売れ線のバンドとは全然違う感じ。

川上: 曲を創ろうとすると、自分の中に蓄積されてるプログレなりマスの要素が無意識のうちに出てくるところもあるけど、基本的にはシンプルだと思います。変拍子っぽく聞こえても普通の4分だっています。

●曲はギターで創ってるんですか？

川上: 2ndからはDTMを使うようになりました。これまでは、ギターやベースを弾きながら創ってたんですけど、DTMに手法を変えてみたら、手垢なんか反映されない分、できあがったものがすごく新鮮に思えたんですよ。[939]っていう曲なんかは特に、その変化が如実に現れると思います。楽器を持たずに作曲したことでスッキリしたというか。でも、僕のDTMの使い方で、一般的な手法からはかけ離れて、ピアノロールを1個ずつクリックして創ってるんですよ(笑)。

山田: 川上さんが持つてくる曲ってリズムが個性的ですよ。しかも、近藤さんがそれにドラムをつけるのとさらに個性的になってますし。

近藤: あと、曲が暗いのも、自分的には好み。[939]とか「トリガー」とか、ポップじゃないところがいい。

山田: 僕は単細胞なロック脳なんで、「カーマ」みたいなあがる感じが好きですね。「FANTASY」なんかはインストとしてもおもしろいから、調子に乗って空間踏んぱんぱんしたし。

●今回のアルバムでは、ゲストに田淵ひさ子さんも参加されてますね。

川上: ひさ子ちゃんがゲスト参加してくれた「君にこの羽をあげる」のアカースティック版なんですけど、歌詞が全然違うんですよ。というのも、僕、2013年に朋友のよーちゃん(=bloodthirsty butchers/吉村秀樹)が亡くなったことで、自分ではどうにも立ち直れないくらい凹んでしまったんですけど、そのとき、それを見かねた玲子さんが、「川上さんのそんな姿を見たら吉村さんも悲しむだけだから」と、よーちゃんと彼の息子をイメージした歌詞を書き下ろしてきたんです。そういう経緯があったんで、アカースティック版としてアルバムに収録することが決まったとき、「これは絶対にひさ子ちゃんに弾いてもらわねば！」

」と想ったんですよ。

山田: ひさ子さんのギターソロに関しては、あがってきた音を聴いたときすごく驚きました。初めて聴いた音色というか、「これまでに聴いたことないギターの音」っていう感じだったんですよ。

●この曲では、山田さんご自身もアコースティックギターで参加されてますよね？

川上: トミーのアコギのプレイは、以前に見て、とてもうまいことを知ってたんで、アコースティックの曲を入れるならぜひ2人でやってみないと前から思ってたんですよ。

山田: あわよくば声がかかればいいなと思ってたので(笑)、非常にうれしかったですね。でも、ベースとして

としての活動が主軸になってくるとギターに戻るのが大変なんで、レコーディング直前にはベースは一切弾きませんでした。右手の弦をはじく感覚が全然違うんですよ。

川上: レコーディングに関していうと、トミーのベース録りはほぼ1日、ドラムは2日で完了したのに対して、そこから僕のギター録りが半年以上かかったのでも申し訳なかったですね(汗)。

玲子: 川上さんのレコーディング終了を待ってからのボーカル録りだったので、正直、待ちたびれました(笑)。

●今回のアルバムテーマは「愛」がテーマということですが、どのような形の愛をうたっているのでしょうか？

川上: 様々な愛の形ですよ。単純な男女間の愛だけではなく、いろいろな愛があって、神様との愛までをもうたっているという。

玲子: そうですね。2ndのテーマを考える以前に、そもそも、わたしの人生のテーマが「愛」だと感じてるんです。そばにいる人を想うということだけでなく、例えば歌詞の中にも「サンサーラ」(訳: 輪廻転生)など時代を超越する言葉を用いていますが、なにげない毎日の中で、そして音楽を通して、遠い未来の人と心でつながりたいという願いもあれば、遥か昔から受け継がれているものを受け取っていきいたいという想いもあるんです。今回のジャケットデザインを、かねてから注目していた染色家の前川多仁さんにオファーしたのも、そうしたわたしの考えを汲み取って形にしてくれるという確信があったからです。オファーにあたって曲を聴いてもらったところ、「生きる希望のようなポジティブな“愛”と野性的な母性みたいな生々しい“愛”っていう対極に近いものが両存してて、それでも無限の包容力に包まれてるっていう印象を曲から受けました」という返事で、ああやっぱりこの人に頼んで間違いなかったと確信しました。

川上: そもそもアルバムタイトルが「kama」(=サンスクリット語で「愛」を意味する言葉)ですもんね。表題曲「カーマ」の歌詞には「ハニートラップ」っていう言葉が出てきますけど、まさか自分の創った曲にこんな単語があてられるなんて！とびっくりしました(笑)。あと、「FANTASY」の歌詞の「真夏の夕焼け 通学路」っていう箇所は個人的にすごく好み。こういうアンダーグラウンドなバンド



swaraga 2nd Album 『Kama』

Gold vox records/GVR-002/¥2,150(+税)

2016.9.23 on Sale!!

イトルを採用されました(笑)。

●最後に今後の展望についてお伺いしたいです。

山田: 近いところでいうとレコ発があったりと、今後、企画をやる機会も増えると思うんですけど、このバンドは特殊な点が多いので、変わり種をやっていただけたいですね。「今日出たバンド、みんな変態だったね！」って言われるような企画なんてまさに理想的だと思います。

川上: 確かに、いわゆる“シーン”とかにパチとはまるバンドじゃないよね。

玲子: わたしは、うたを創るときも歌うときも頭の中に映像が浮かんでるんですけど、音楽と、心象風景も含む映像って切り離せないものだと思うので、今後は、swaragaが描く世界の具現化や、映像作品とのコラボにも注力していけたらいいですね。

Live Schedule

11/12(土)@新大久保EARTHDOM (レコ発)
w/ BACTERIA/ele-phant/Din remoter

swaraga

Interview: S. Kangetsu Photo: Yohei Fujii

《Official web site》swaraga.com 《twitter》@swaraga 《facebook》@swaraga

町田町蔵&人民オリンピックSHOW.突然段ボール.CANIS LUPAS.EVIL SCHOOL等で経歴を重ねた、邦楽アンダーグラウンドシーンの重鎮、川上啓之(Gt)率いるswaraga(スワラガ)の待望の2nd Albumが、9月23日、満を持して発売となった。元BUCKET-Tの山田富士郎を新ベースに迎えての本作には、bloodthirsty butchers.toddleの田淵ひさ子もゲスト参加。アート界注目度NO.1の鬼才染色家、前川多仁が手掛けたジャケットデザイン。衣装は、他に類を見ない前衛的な様相を呈している。まもなく開催されるレコ発の前に、近藤慎一(Dr).松本玲子(Vo)を加えたメンバー4人を招集。音作りやアートワークに関して伺った。

